



みずみどり

2005年3月15日

第47号

発行：いたばし水と緑の会 事務局

年会費 2,000 円 郵便振替 00170-8-352508 いたばし水と緑の会

<http://homepage3.nifty.com/mizutomidorinokai/>

E-mail : mizumidori@nifty.com

〒174-0063 板橋区前野町 5-31-7 瀬田方 tel&fax3969-7124

ゴマダラチョウに会いに 赤塚城址にでかけませんか



羽化したばかりのゴマダラチョウ 2003年5月10日

ゴマダラチョウはエノキの葉を食べるきれいなチョウです。赤塚城址では日当たりのよい城址の広場に面して大きなエノキが何本もあります。

1997年1月、赤塚城址で釣巻さんの指導ではじめてゴマダラチョウの冬越しの幼虫探しをしたときの感動は今も忘れられません。そのとき私はエノキの見分けもつきませんでした。

ゴマダラチョウは、冬になると木から下りてきて幼虫のまま、枯れ葉にくっついて春を待ちます。冬の寒い日、エノキの根元の落ち葉を1枚、1枚めくってゴマダラチョウの幼虫を探すのです。ちょうど落としたコンタクトレンズを探すような格好で、はいつくばって、正直なところ根気のいる調査です。幼虫がぞろぞろ出てくるわけでもない。そのときは10人ほどが散らばって幼虫を探して見つかったのは3匹位でした。しかし枯れ葉の裏にしっかりくっついて春を待つゴマダラチョウの幼虫は、健気で、思わず応援したくなります。考えても見てください、小さ

な虫が、高いエノキの枝から下りてきて、冬の間枯れ葉にしがみついて何も食べずに過ごし、春になったら飲まず食わずのまま、また高い梢までのぼって行くのです。えらいですねえ。

木の根元に落ち葉がとどまっていることが重要です。根元がさっぱりしていると、落ち葉は風に飛ばされてしまうし、また草刈りをしたり、落ち葉を掃除すると…いずれも幼虫は一巻の終わりです。

それまで、落ち葉を集めて腐葉土にし、「カブトムシのゆりかごを作ろう」なんて単純な認識しかなかった私には、枯れ葉を利用する昆虫がいることに驚きました。

冬越しの幼虫は枯葉色ですが、春になってエノキの葉っぱを食べているゴマダラチョウは、新芽の色から新緑のきれいな緑色で、やがて、サナギになって、羽化します。オオムラサキの仲間なので幼虫の姿もよく似ているそうです。私はオオムラサキの幼虫も成虫も見ましたがありませんが、ゴマダラチョウの成虫もとてもきれいです。



幼虫 2003年4月23日



サナギ 2003年5月5日

ゴマダラチョウを観察するには、まず幼虫の食樹であるエノキの木を探します。エノキの葉っぱは右図のような形をしていて、左右非対称(少しゆがんでいる)、葉の下半分(軸の方)にはギザギザがない、葉脈が元のほうで3本に分かれている、ことが特徴です。大木のエノキでは葉っぱにいる幼虫を探すことは不可能です。が、1mくらいの若いエノキの木はあちこちで見つかります。エノキの実が野鳥の好物で、糞と一緒に種を落としているからです。

その1m内外の若いエノキが多いところが日当たりのよい赤塚城址のバッタ広場です。バッタ広場とは草原のピオトープの愛称?ですが、ちょうど目の高さに枝があって、虫を探しやすい場所なのです。



草原としての管理上、2003年4月に1m以上のエノキの若木を切ったとき、枝にはたくさんゴマダラチョウや他の幼虫がついていました。幼虫をエノキの大木の根元に放しましたが、やれやれと、もう一度木に登ってくれたでしょう。

なぜ幼虫が春先ここに多いのでしょうか。卵を産むとき、エサの葉が十分にあって、また木が低くて登り降りするエネルギーが少なくてすむ場所を選んだかどうかはわかりませんが、草がぼうぼうなので、安全に冬越しでき、幼虫の生存率も高いはずです。

私はこのバッタ広場で、ゴマダラチョウの羽化に出会い、幼虫に出会い、サナギに出会いました。今年は、羽化したゴマダラチョウが産んだ卵や、卵からかえったばかりの小さな幼虫を見たいなあ、と思っています。

自然は、「草地」、「樹林地」と明確に区分されたものではない。ここには「樹林の気がある草地」のあいまいな環境のおもしろさがあります。公園の中に、生き物がすみ、私たちも生き物の生活に触れ、共感できる場所があることは、貴重なことではないでしょうか。

最後をお願いします。昆虫は採集して絶滅するものではない、昆虫のいる環境を破壊するからいなくなるのだ、と言われます。それは正しいと思います。この狭いバッタ広場でも中に入れてもいいし、昆虫採集も禁止していません。しかし、です。大勢の子供達に来て、片っ端から捕まえてもって帰ったら、昆虫達にも相当な打撃です。そっと蝶の成長を見守ってくださるようお願いします(坂本 いくこ)。

梅まつり

「生き物の環境と湧き水を保全するために」のコーナーも好評

3月5日、前日の春の雪が消えて、少々ぬかるみがあるものの青空の下での梅まつりとなりました。会は、赤塚の自然の紹介するために今年も環境保全コーナーで出展しました。お手伝いに参加した会員は、5日は13人、6日は10人。

今年は寒かったのでカエルはまだ冬眠中。去年は卵があったけど、今年はまだかしら、と池を覗き込む人もいました。展示は、池に放されて困っている生き物のパネル、カエルの生活を紹介したパネル、釣巻さんがつくったこの雑木林にいる昆虫の標本、ゴマダラチョウの

一生、トンボ池と湧水水路に来た生き物のミニパネル。展示の前は人が絶えず、標本やパネルの説明をしたり、自然の話もいろいろできました。

のこぎり体験の看板の下は今年も盛況。材料は公園管理で切った枝(シロダモ)と、竹(タケノコ公園)をもらったもの。直径が8cmほど枝は子供達の手におえないので、半分ほど切ってやり、のこぎりの引き方を教え、手を添えて、と、至れり尽くせりの「のこぎり体験」。

その輪切りにした枝に絵を描き、金具をつけてもらい、好きな色のリボンを通して「木の枝ペンダント」の出来上がり。大きいと出来映えも豪華で子供達も満足のように。ノコギリを引いている子供の写真を撮る親も多かったですね。それから「今日はもうおしまい」にしたら、子供がやりたいと泣いていると怒鳴り込んできた男性がいました。ボランティアでやっているのにと、こちらでも気分が悪くなった「事件」でしたが、それほど楽しそうに見えた工作だったのでしょう。

今年は、井上さんが竹の花入れ(持ち手のついた凝ったもの)の見本を作って並べました。つくるのに時間がかかるのに、つくりたいという希望者はだいたい女性で、世話係がほとんどつくってあげたような参加コーナーでした。



ペンダント用のリボンと金具、油性マジックなどの材料費が 7265 円(ペンダントの工作は無料)、「竹の花入れ」作りの参加費の収入がちょうど 10000 円で、2735 円の黒字。今年は固定する台も 1 台で、枝が太くて作品作りに時間がかかり、完成したペンダントは約 200 個で昨年の半分でしたが、大量生産でないよさがあり、サービス満点でした。

赤塚トンボ池 今年のカエルは20匹

「3月13日(日) 赤塚トンボ池にカエルが集まっている、数えたら20匹。」との情報。19日見に行ったら、なるほどカエルが多い。今までの最高か。だがまだ卵を産んでいない。大きなコイが動き回り、カエルが泳ぎ回り、バシャバシャとにぎやかで、水も濁っています。カエルの小さな声も聞こえる。

気になるのがこの小さな池にむりやりいるコイ。ため池で釣れた大きなコイをこのトンボ池に放流する人がいるようです。

2004年3月初め大きなコイ3匹他を捕獲、と思ったらすぐにコイがまた放流され、2004年の湧水で40cm以上の大きなコイ4匹が浮上、そして今また、大きいコイがいる。ザリガニもいるし、カエルにも明るい未来はなさそう。なんとかしなければ。



カエルは来たけれど・・・



水辺ビオトープとミズムシ

私は白子川と流域の水環境を良くする会で、3年間、毎月湧き水の水温・水量、生き物の調査をしています。そこで水生生物から見た水辺の環境を白子と赤塚湧水地で比較してみました。

和光市白子の有名な湧水地では、すごい水量の湧水が溝を流れ道路の側溝に落ちていきます。落ち葉や水草などもない粘土だけの溝にはオニヤンマもヘビトンボも見かけません。

付近には、クレソンなどの水草が生え、泥がたまり、水底や水草の根元に落ち葉がある湧水地があります。ここは生き物が多い。カワニナ、プラナリア、水の中の大きな石を持ち上げるとヘビトンボが1匹、落ち葉や泥の中にはオニヤンマのヤゴがいます。2年前には1cmほどのオニヤンマのヤゴがいっぱいいましたが、今は大きくなったヤゴがいますが、数は減りました。落ち葉のなかにはたくさんのミズムシがもぞもぞ動いています。ヘビトンボやオニヤンマの幼虫はミズムシなどの水生生物を食べ、あるいは共食いし、この小さな水辺に数年間

幼虫で過ごします。

ミズムシは1cm以下の甲殻類で(昆虫のミズムシもいるので紛らわしい)、腐った落ち葉などを食べ、汚い水(中腐水性)にいる生物とされています(が、白子の湧水地の水はもちろんきれい)。ミズムシについてインターネットで調べていたら(足の指に発生する水虫の方が情報は多いですが…)、ゲンゴロウを飼育している人がホームページでミズムシの生態を書いていました。この人はゲンゴロウの飼育から、ゲンゴロウのエサ、水辺生態系の一員であるミズムシへの関心が深まったようです(余談ですがエサ用のボウフラを飼うとすぐに蚊になるから困るとか)。

このミズムシ、水の中の水草や落ち葉をきれいにさらってしまうと少なくなります。流れが速い水辺でも、水草やコケの茂み、水草にひっかかった落ち葉などによって流れがよどんでいるところに落ち葉などを食べるミズムシがいるのです。ボウフラもそうですが、トンボの環境を考えるならば、トンボのエサの環境にもっと関心をもたなければならないのでは、と思いました。そして以前三島先生の勉強会で「トンボのエサはあるのですか」と言われたことも思い出しました。

1998年春に完成した乗蓮寺下のピオトープで6月に動植物調査をしましたが、このとき、羽化したばかりのオニヤンマを発見し、23区ではめずらしいことと釣巻さんがテレビに出ました。ピオトープができる前からすみ着いていたオニヤンマでしたが、オニヤンマの他にイトトンボのヤゴ、ミズムシ、ガガンボの幼虫、カゲロウの幼虫と成虫がいました。ミズムシやカゲロウがいたところは、掘ったばかりの池ではなく池の周辺のわずかな湧水でじめじめした落ち葉のたまっていたところでした。

見次公園にもミズムシがいるところがあります。わずかな湧水がしたたり落ち、濡れ落ち葉がたまっている汚らしいところ。ところが今の赤塚トンボ池にも湧水水路にも、ミズムシの姿はないのです。

結論:ミズムシがすべてではないが、ミズムシの復活からピオトープを考えたい。ミズムシがいるところは濡れ落ち葉がたまったごく浅い水際、水の中の水草やコケの中、水域と陸域の中間(水際)の環境ではないでしょうか(坂本 郁子)。

水辺ピオトープの管理について

17年度は私たちが期待していたピオトープと現状のトンボ池について検討するにあたって、2003年5月水と緑の会の勉強会における桜美林大学名誉教授の三島次郎先生のお話をもう一度掲載します。

基本はきちんと「自然(ピオトープ)」の定義から。地球であろうと赤塚であろうと定義は同じ。

自然とは生き物のすむ場所、つまり好きな動植物も都合の悪い動植物(外来種であろうと、ザリガニであろうと)も住み、彼等がお互いに関わりながら繁栄する種がいたり、劣勢になる種がいる場所。もちろんその優劣は私達でなく彼等が決める。

自然地(ピオトープ)とは何か、をしっかりと認識したうえで、「何か特定の生き物を呼ぼう」と意図的に手を加える場合は、厳密に言うともはや自然ではないが、何のために何をしているのかを理解しながら行うこと。また公園に来る人たちに理解してもらうためには、教育(PR)は非常に大切である。

私達は自然地として管理しているつもりでも、矛盾や思いこみも多く、刺激に富んだお話でした。「トンボ池をどうするか」ひとつとっても、現在多くのピオトープが抱えている問題です。ザリガニを苦勞してとっても、捕獲した分だけザリガニは増えているのかもしれない。いったいどの位のザリガニの数量がいるのか把握するために、捕獲したザリガニに印をつけて放し、また印をつけて放す、ということを繰り返して、池にいるザリガニの個体数を推定できないか、という意見もありました。

ザリガニ食害説も検証してみる必要があります。オタマジャクシやニンジンを食べるのを見たり、クレソンや芹がザリガニが入った途端なくなってしまった、という経験はありますが、トンボが餌食になっているか、水草は全部食べてしまうのかという証拠はありません。ザリガニ以外にヤゴがいない原因を検討することも必要です。私達が、独自の調査をしたり実験したりすることが、意味のあることだと思いました。出席者が少なくとても残念でした(14人)。

組んず解れず トウネズミモチ バトル

「来た！」- 来ましたよ、いよいよ。第46号の篠原先生による『季節の観察メモ』を読ませていただいた時の第一感がこれだったのです。「中国ではトウネズミモチを女貞と呼び実を強壯薬に…」との欣喜雀躍たるお言葉。

ヒヨドリにも負けず、泥棒ネコにも負けず、天日乾燥に血道を上げてきた秘蔵のトウネズミモチの実を凝視してニンマリ。しめしめ、あとは「3~5gを400ccの水に入れ、30分ほど煎じて3回に分けて服用」すれば……強壯だよ、強壯と極めて順調。強壯には対象が必要かなと一抹の不安が過ぎるが、この際、10年ほどから「毎日が更年期」で家庭内別室中の<襲妻>には、スーパーサブの座に居据わってもらうことにする。ここはなんといっても寝た子を起こすような愚行だけは避けねばならない。

土鍋の中で、トウネズミモチの実が茹りながら「早うせんかい！」と急ぎ立てているようなので、老い先短く<猛母>を無理やり登場させる。大正10年に生を享けて、じきに80と4歳。事の顛末をじ-っと聴いていた<猛母>曰く、「また月経がくるかしら」。以下次号(手弱夫)

活動のお知らせ

運営委員会は毎月第1金曜日です。どなたでも参加できます。

4月運営委員会： 4月1日(金) 18:30～20:30

5月運営委員会： 5月6日(金) 18:30～20:30

いずれもエコポリスセンターです。

会報の印刷・発送は奇数月。お手伝いできる方はよろしく

日時：5月17日(火) 18:00～ 場所：エコポリスセンター

変更する場合もあるので、事務局にお問い合わせ下さい。

活動の問い合わせは瀬田まで(3969-7124)

原則として毎月第4土曜日が定例の活動日です。この日は、赤塚や徳丸が原公園で私たちが作った自然の場所を中心に午前中は自然観察やゴミ拾い、必要な修理等を行っています。

原則として雨天も実施します。

第8回(17年度)総会と懇親会

会ができて8年目を迎えました。自然を掲げる市民団体として、むずかしい都市の中の自然のあり方や関わり方、一般へのPR方法などを暗中模索していますが、赤塚公園などで私たちが行政の許可を得て行ってきた自然管理・実験も含めて1年間を振り返り、見直しをし、17年度の活動計画を決める大切な会合です。非会員の方のオブザーバーも歓迎です。

日時：4月23日(土)10:00～14:00

場所：四葉集会所(洋室) (四葉2-9、成増-赤羽バスの「四葉町」からすぐ)

持ちもの：各自の弁当、会費500円(懇親会飲み物)

3月の活動 城址の観察会とゴミ拾い

公園の春の自然を探しましょう。ついでにゴミも拾います。

日時：3月26日(土)10:00～12:00

集合場所：美術館前トンボ池

持ち物：観察にはルーペや図鑑、ゴミ拾いには軍手、ゴミ袋

トンボのすめる環境整備の活動

浄蓮寺下のピオトープのザリガニ対策、赤塚トンボ池の水際復活作戦として、調査・実験と作業を行います。平日も入れて週2回程度で、平日だけ、休日だけの参加も可。近場のトンボの水辺の見学も検討中。

日時：未定(3月26日にきめます)

集合場所：美術館前トンボ池

連絡先：坂本 3968-9760